

# 多文化主義時代と映像

## Visual Representation in the Age of Multiculturalism

### ハリウッド映画の中のアジア人

### Asians in the Hollywood Movies

村上 由見子  
MURAKAMI Yumiko

#### 1. 「アジア系アメリカ人」について

今日は「多文化主義時代と映像——ハリウッド映画の中のアジア人」というテーマで、ハリウッド映画の中でアジア人はどう表象されてきたか、実際にビデオ映像をお見せしながら、その歴史を検証してみたいと思います。

さて、アメリカの「多文化主義と映像」を語るにあたり、まず初めに言及しておきたいのが「アジア系アメリカ人 Asian American」の存在です。これは今日の話の下敷きとなる重要なポイントですので、ここから話を始めたいと思います。

今日、アメリカが多民族社会、多文化社会であることはよく知られています。しかし、私たち日本人一般にとって、アメリカ人という概念は「白人」及び「黒人」、そこに「アメリカ先住民（インディアン）」が加わって加わってくる、といった認識でしかなく、私たちと同じようなアジア系の顔をしたアメリカ人がいる、という事実すらなかなか気がつかないできました。

実際、アメリカでも永らく「見えないマイノリティー」と言われてきたアジア系です。それは後に見ていくようにハリウッド映画の中の扱いでも同様でした。アジア人は往々にして「永遠の外国人 perpetual foreigners」とされ、国内のアジア系マイノリティーもまたそう見なされてきた長い歴史があります。

しかし、21世紀を迎えようとしている今、アジア系の存在は大きく注目されています。昨今、アメリカ研究では「多文化主義」「ポストコロニアリズム」「移民」「越境」「ディアスポラ」といったキーワードが浮上していますが、アジア系

アメリカ人の存在はこういった研究の重要な一画を担っています。

とはいえ、私たちにとって「アジア系アメリカ人」はまだ馴染みが薄いことは確かです。しかし、名前を挙げれば知っている、というアジア系は少なからずいるはずで。

若い方なら、有名なロック・グループ「スマッシング・パンプキンズ」のカリスマ的ギタリスト、ジェームス・イハをご存じかもしれません。イハ（漢字では「伊波」）はシカゴ生まれの沖縄系三世です。また、世界的チェリストである中国系のヨー・ヨー・マも、アジア系アメリカ人の一人です。クラシック好きな方は、指揮者の最高峰といわれるズービン・メータをご存じでしょうが、彼はインド系のアジア系アメリカ人です。最近、香港アクション映画の巨匠ジョン・ウー監督もハリウッドで次々と映画を作っていますが、すでに家族でアメリカへ移り住んだウーも、今やアジア系アメリカ人の一員と呼んでいいでしょう。

また、長野オリンピックで活躍したフィギュアスケーターのミシェル・クワンは台湾系二世です。インターネットに詳しい方は検索サービスの「Yahoo!」をご存じでしょうが、あれを最初に立ち上げたのがスタンフォードの大学院生だったジェリー・ヤンという青年で、彼もやはり台湾から 10 歳で移民したアジア系アメリカ人です。このように数人を例に挙げることで、アジア系アメリカ人のイメージが少しはつかめてくると思います。

アメリカには今、約 1000 万人のアジア系が生活しています。これは、たかだか全人口の 4%弱ですが、カリフォルニア州に限ってみると、人口の 12%がすでにアジア系であり、これは州内の黒人の数を超えています。

カリフォルニアで名門といわれる UCLA と UC バークリー、この二つの大学ではここ数年、アジア系新生は全体の 40%を超えています。もちろんこれはアメリカに住み、英語を母国語とし、アメリカ市民として願書を出したアジア系高校生の占める割合であり、アジアからの留学生は除外した数です。4 割という数字も白人の合格率を超えています。アジア系が往々に

表 1 アジア系人口の推移

年	人数
1960	877,934
1970	1,526,160
1980	3,726,440
1990	7,273,662
1995	9,756,000
2000	12,125,000 (予測)
2020	22,653,000 (予測)
2050	40,508,000 (予測)

して「モデル・マイノリティー」と言われる理由は、このような教育レベルの高さにもありません。

表 1 でお分りのように、アジア系の人口はここ 30 年ほどで急激に伸びています。アメリカでは 10 年ごとに国勢調査（センサス）が行なわれますが、1960、1970、1980、1990 年と、10 年ごとに倍倍で増えているのが数字からお分りになると思います。

表 2 はアジア系人口のエスニック別内訳ですが、ここで各エスニックの移民史を駆け足で振り返っておきましょう。アジア系移民たちがいかにアメリカへ入ってきたか、その歴史は後述する映画描写にも深く関わってくるからです。

アジア系移民の始まりは、前世紀のゴールドラッシュの時代、中国系労働力流入の時代に遡ります。今から 150 年ほど前、カリフォルニアで金鉱が発見されるとともに、金鉱を掘るための労働力の需要が一举に高まりました。こうして、中国大陆から安価な労働力として中国人クーリーが「輸送」に近い形で次々とアメリカへ送られてきました。弁髪姿でチャイナ服を着た彼ら労働者たちは、カリフォルニア、ネバダ、オレゴンなどの鉱山で鉱夫として働き、後には大陸横断鉄道の建設工夫として駆り出されます。ユタ州の山奥などでは、山を爆破して線路を敷いていったわけですが、その苛酷な労働は「枕木一本に中国人一人の死があった」と言われるほどでした。

こうして彼ら中国人が次第に各地にチャイナタウンを形成し、定住していった結果、今や五世から六世を輩出する時代となりました。さらに、戦後は共産主義中国から逃げてきた政治難民、最近では天安門事件で亡命した学者や学生、または香港の返還前に移民してきた家族も加わってきます。あるいは「太子党」といわれる中国共産党幹部の子弟たちがアメリカ留学の後に永住権を取得してアメリカに住み着く、といったケースも増えています。ひとくちに中国系 165 万人と言っても、多様な移民史の地層が隠されているわけです。

人口が二番目に多いのはフィリピン系です。1965 年にアメリカで移民法が改

表 2 エスニック別人口 (1990)

エスニック	人数
1. 中国系	1,645,472
2. フィリピン系	1,406,770
3. 日系	847,562
4. インド系	815,447
5. 韓国系	798,849
6. ヴェトナム系	614,547
7. ラオス系	149,014
8. カンボジア系	147,411

正され移民枠が大幅に緩和されたことにより、フィリピンからは中産階級の人たちが次々とチャンス را求めてアメリカへ渡ってきました。

三番目に多い日系人にも、すでに 130 年の長い移民史があります。19 世紀後半、中国系移民が排斥されると、それに取って代った労働力が日系移民でした。しかし日系移民もまた激しい差別・排斥を体験します。戦争中には 12 万人の日系人が「敵国外国人」として隔離され、強制収容所へ送られました。今はもう三世、四世の時代ですが、アメリカ生まれの彼らは日本語はほとんど話せません。

四番目に挙げられたインド系もこのところ急増しています。彼らは理工系に強いと言われますが、シリコンバレーにもインド系技術者が目立ちます。こういう人たちはもともと本国内で英語教育を受けてきた上流階級の人たちです。その一方で、アメリカの大都市には南アジア系のタクシードライバーも多く、ニューヨークの地下鉄駅のニューススタンドはほとんどがインド系です。また、今やアメリカのモーテルの 3 分の 1 がインド系経営です。アメリカン・シーンはかように多様化し、変容してきています。

急増しているといえば五番目に挙がっている韓国系も同様です。韓国系も 60 年代、70 年代にアメリカン・ドリーム را求めて家族で移民してきたケースが多いのですが、韓国で高等教育を受けていてもアメリカで専門職に就けるというわけではない、そこで即生活できるという手段として、多くの新移民が酒屋とかミニスーパー、レストラン等のスモールビジネスの商売を始めました。しかも黒人街で一家総出で 24 時間営業の商売と、彼らにはたくましい生活力があります。しかし、それがまた黒人側といろいろ摩擦を起こしている、といった問題も生じています。

小さい時に親と一緒に移民してきたこどもたちのことを、一世と二世の間をとって一・五世(ワン・ポイント・ファイヴ・ジェネレーション)という言い方がありますが、彼らもすでに大学生、社会人となってアメリカで活躍を始めています。

ヴェトナム系やラオス系、カンボジア系というのは難民です。1975 年にヴェトナム戦争が終結し、アメリカがヴェトナムから撤退したあとに、アメリカは続々と政治難民を国内に受け入れました。今やすでに、アメリカ生まれで英語しか話せないというヴェトナム系やカンボジア系の若者も多くなっています。

ここには上位 8 グループしか挙げていませんが、この他にもタイ系、インドネシア系等、さまざまなアジア系が続きます。

このように、アジア系とひとくちにいても、実態はこれほど多様なわけで、ひとつのグループにまとまるなんてとても無理ではないか、という声もあります。

しかし、全人口の約 13%を占める黒人、約 10%のヒスパニックが、政治力を結集しているのと比べて、アジア系というのはまだまだ微力です。

これまで長く「見えないマイノリティー」と言われてきたアジア系ですが、最近は政治の世界にも徐々に姿を見せるようになってきています。例えば、今、ハワイ州知事はフィリピン系ですし、ワシントン州知事はゲイリー・ロックという中国系です。また、1998 年秋の中間選挙でも、カリフォルニア州から上院選にマット・フォンという中国系アメリカ人が出馬しました。オレゴン州からも中国系の下院議員デビッド・ウーという人が今回初当選しました。それでも、上院にはハワイ州からの二人だけ、下院ではたった三人です。

このようにアメリカ社会の中で自分たちもアメリカ市民の一員だと主張し、その姿を「見える」存在にしていこうとアジア系は政治的にも結束を固めつつあります。

それと同時に、彼らが結束しなくてはならない大きな理由が、いまだアメリカ社会に根強く残っているアジア系に対する誤解、偏見、無知、そしてステレオタイプです。

長野オリンピックの女子フィギュアスケートでは、ミシェル・クワンとタラ・リピンスキーの二人が一騎打ちとなりました。二人ともアメリカ人で、どちらがメダルを取っても星条旗が掲げられます。それにもかかわらず、リピンスキーがクワンを破って金メダルをとった時に、アメリカの NBC のインターネットニュースが、「アメリカ人、クワンを破る American Beats out Kwan」という見出しを挙げました。これではまるで、アジア系クワンはアメリカ人ではない、白人こそがアメリカ人代表だ、と言っているのも同然です。これに対し、アジア系アメリカ人団体は猛烈な抗議を起こしました。

マスコミでも往々にして、こういう表現が出てきてしまう。そして悪気はなかった、人種差別のつもりはさらさらなかった、と言い訳をする。しかし、それは深層意識にすり込まれた人種観でもあります。アジア系アメリカ人は「私たち

はもう 150 年もこの国にいるのに、いまだ外国人扱いされている、いまだ正式会員に入れてもらえない」という深い嘆きがあるわけです。

## 2. ハリウッド映画の中のアジア人描写

それでは、こういったアジア系という他人種に対する観念、深層意識にすり込まれたアジア人像というのは、いかにして形成されてきたのか、それを次にハリウッド映画の歴史を振り返りつつ検証していきたいと思います。

映画が面白いのは、その時代の大衆感情が「凶らずも」現われてしまっていることです。

ハリウッドが誕生した今世紀初めというのは、じつはカリフォルニアでは猛烈な日系移民排斥があった時代です。

アメリカは移民の国だといいますが、当時アメリカ人となれたのは大西洋を越えてきた白人であって、太平洋を越えて流入してきたアジア系移民は「帰化不能外国人 *aliens ineligible for citizenship*」の烙印を押されていました。これは後に 1952 年の移民法改正で、アジア人も審査によりアメリカ市民権を取ることが出来るように変更されますが、それ以前、アジア系移民一世はアメリカ人になる資格がないと見なされていたわけで、アメリカ人になれたのは属地主義によりアメリカ生まれの二世からでした。

19 世紀後半はまず中国系移民に対して排斥運動が展開されました。労働力として入ってきた彼らに、ここに定住されては困る、なぜなら彼らはアメリカ人とは見なすことのできない「帰化不能外国人」だったからです。

そして 20 世紀になれば、日本という小さい島国が大国ロシアに戦争で勝ったというニュースが入ったと思うや、その日本から続々とカリフォルニアに移民が押し掛けてきます。ちょうどハリウッドの始まったといわれる 1907 年は、日本から 3 万人の移民が押し寄せ、移民流入のピーク時となりました。

20 世紀初頭、ハリウッドが始まった頃、アジア系移民はまだ「オリエンタル」と呼ばれていました。今日、アメリカでは「オリエンタル」という言葉は古めかしいどころか、アジア系アメリカ人にとっては非常に不愉快な呼び名です。「オ

リエントル」という呼称には、どこか、いかがわしい、ミステリアスで不可解な他者としての東洋人、といったニュアンスがいまだ付きまといまいます。

前世紀、有名な作家キプリングが言った「東は東、西は西、両者ともにあいまみえることなし」という言葉があります。東洋と西洋は決定的に違う、という命題です。永らく、東洋というのは西洋と対峙するものとして、ある時は脅威（怖れ）を、ある時は憧れ、あるいは好奇心をかきたてる存在でした。いわば、西洋にとって東洋とは自分の意識を映し出す鏡でもあったわけです。西洋の観念の中で育まれてきた東洋イメージは、今は「オリエンタリズム」と批判的に言います。ご存じのように、エドワード・W・サイードの著作『オリエンタリズム』以降、この研究はさまざまな分野で急速に広がっています。

ハリウッド初期には、エキゾチックなオリエンタルものが続々と作られました。そこに映し出されるのは、東洋に対する当時のアメリカの目線であり、これもまた一種の「オリエンタリズム」と呼んでいいでしょう。

初めに、1910年代に作られた2本のサイレント映画からお見せします。どちらもハリウッドの名作で、映画史研究には欠かせない2本とされています。

『チート』*The Cheat* (1915) に主演した日本人俳優の早川雪洲はハリウッド初期の大スターでした。この作品で彼は金持ちの美術商を演じています。彼は、この白人女性に金を貸したのですが、それを返してきた女性に対し、お前はもう俺のものだ、と女性の肩に焼きゴテを押す残酷なシーンです。焼きゴテとは「所有者」を示す刻印ですが、借金と引き替えに異人種の「所有物」にされてしまうというのは、セクシャルな恐怖感をかきたてます。



雪洲は、このように一種悪魔的な魅力を秘めたエキゾチックな東洋人俳優として人気を博しました。一見、穏やかな紳士ですが、隠されていた感情がいったん爆発すると何をしでかすか分からない、といった役柄に、当時のアメリカのアジア観の一端が見てとれるかもしれません。



『散り行く花』 *Broken Blossoms* (1915) の主人公リリアン・ギッシュはサイレント時代の名女優ですが、この少女は非情な父親に暴力をふるわれて逃げ、たまたま中国人の雑貨屋に倒れこみます。この中国人を演じるのが白人男優のリチャード・バーセルメスです。私たちからすると

とても中国人には見えないのですが、彼は帽子の下にきついゴムバンドを締めてなるべく目を吊り上げる努力をしていたそうです。ベッドに横たわる少女にオズオズと近付き、いったんはギラギラとした欲望を顕にしますが、次の瞬間にはそれを押さえるなど、どこか動物的で、それがまたあぶない雰囲気醸し出しています。これはどことなく『美女と野獣』的な構図を思わせます。二人は最後までプラトニックな愛を貫き、そしてともに死んでいきます。

ところで、ハリウッド映画には多くの白人がメーキャップして東洋人を演じてきたという歴史があります。とくにトーキーとなると、英語がヘタだった雪洲などはとたん姿を消し、白人が「吊り目」や「一重まぶた」のメイクをしてどんどん東洋人に扮します。いわば特殊メイクのはしりですが、ハリウッドはこの吊り目メイクになみなみならぬ情熱をかけてきました。そして、ここにもアメリカがアジア人という「他者」「異文化」をどう認識し、どう表象していたか、といういわばあちら側の「解釈のカタチ」が図らずも現われてしまっています。

次に、白人が扮した東洋人をいくつかお見せしていきましょう。



*Bitter Tea of General Yen* (1933) は、有名なフランク・キャプラ監督の作ですが、これは許婚を訪ねて上海に来た白人女性（バーバラ・スタンウィック）が中国人のエン将軍（ニルス・アスター）に拉致されてしまう、というストーリーです。非情で残酷なエン将軍に彼女は知らず惹かれてい

ってしまう。彼女がまどろむシーンでは、長い爪のエン将軍が襲いかかってくる。異人種にあわやレイプされる悪夢です。そこに登場して彼女を救い出した紳士、

しかしマスクを取ると、これもまたエン將軍だった……。彼女は彼を忌み嫌っているのですが、夢の中では倒錯した感情が顕わになっています。そして、ここでのキスシーンは当時は大事件でした。白人女性が東洋人男性と相思相愛のキスをするなどという描写はタブーの最たるものであり、現にイギリスではこの映画は公開が許されませんでした。

次に映画ではないのですが、重要な史料としてオペレッタ *The Mikado* のワン・シーンをお見せしましょう。『ミカド』は1885年にロンドンで初演されてから今にいたるまで、欧米で愛され続けてきたオペレッタです。お見せするのは「ミカド登場」の有名なシーン。この「とことんやれ節」



も日本語のままです。フワフワとなびかせたキモノドレスの円舞などは、オリエンタリズムの極致と言っていていいでしょう。しかしなにしろミカド、天皇ということで日本で正式に公演されたことは一度もありません。つまり、これは100年以上に渡って、欧米人俳優によって欧米人観客のために欧米の地で公演されてきたという不思議な舞台です。そして、ニッポンのイメージ醸造に『ミカド』が大きく貢献してきたことは確かです。

さて、1930年代半ば、ハリウッドでは映画産業界による自主検閲が行われるようになります。ヘイズ・コードと呼ばれる映画製作倫理規定の成立により、猥褻描写や異人種間の恋愛は描いてはいけない、などといった規制が設けられました。それによって新たに登場してくるのが、性的脅威をまったく抜き取った東洋



人キャラクターです。次にお見せするのがそれで、いずれも白人俳優によって演じられ、人気を博したシリーズもの、中国人探偵のチャーリー・チャンと日本人スパイのミスター・モトです。

「チャーリー・チャン」シリーズは戦前だけでも30数本製作されたという人気の

シリーズですが、一代目チャンを演じて有名になったのが、この **Charlie Chan at the Circus** (1936) にも登場するワーナー・オーランドという俳優です。これで中国人に見えるというのが不思議ですが、なまげ髭、細い目、たどたどしい英語、緩慢な動きなど、これらが中国人を語る時の一種の「記号」だったわけです。

**Charlie Chan at the Wax Museum**

(1940) に出てくる二代目チャーリー・チャンはシドニー・トラーという俳優です。巨漢、細い目、なまげ髭といった「記号」は同様です。チャーリー・チャンはホノルルの探偵で、いわば中国系一世ですが、子だくさんということで、ここでぞろぞろ登場します。奇妙なのは、アメリカ生まれの二世である子供たちはすべてアジア系をキャストしている点です。



チャンはアメリカ人の観念から生み出され、アメリカ人観客に向けて、白人によって演じ続けられた「中国人」でした。今、中国系アメリカ人の中で「チャーリー・チャン」という名前は限りなく忌まわしいステレオタイプ、という代名詞にもなっています。



ちなみにもう一人、欧米の観念の中で育まれた有名な中国人として、世界制覇を狙う悪の帝王、ドクター・フー・マンチューも見ておきましょう。この強烈なキャラクターも 20 年代からえんえんハリウッドに登場しますが、**The Face of Fu Manchu** (1965) はイギリスで作られた映画で、フー・マンチューを演じているのが名優のクリストファー・リー、ドラキュラ俳優として有名だった人物です。この他にも、ロン・チャニー、ボリス・カーロフなど「グロテスク特殊メイク」で有名だった俳優が中国人に扮している点が、ハリウッドの中国観の一端を語っています。



**Mr. Moto's Last Warning** (1939) で日本人ミスター・モトを演じたのが、名脇役として知られるピーター・ローレ。ヨーロッパからの亡命俳優でもあります。ミスター・モトは国際秘密警察の優秀なスパイですが、ここでは骨董屋に化けて、わざとアホ役を演じてます。そしてここで話す独特

の英語、“Me no likee” とか “Apologizing please” といった表現も「東洋人が話すであろうヘタな英語」というステレオタイプです。ミスター・モトのシリーズは戦前に8本作られています。

東洋人に成り代わって演じる、というのは一種の「翻訳作業」です。このように翻訳している、というアメリカ側の認識のあらわれであり、その時代のアメリカのアジア観を反映している、というわけです。

さて、小柄でアホっぽくてじつは頭脳明晰なミスター・モトでしたが、1941年に日米間で戦争が始まると、彼はとたん姿を消します。

次に、戦争中に、敵国だった日本人がどう描かれたか、3本の映画をお見せしましょう。

**Dragon Seed** (1944) はパール・バック原作の映画化。中国のとある村での政治集会のシーンですが、日本軍が中国各地でいかに残虐な行為をしているか、スライドを見せて説明しています。まわりのエキストラはアジア系ですが、主要人物はここでもすべて白人です。主人公は名女優キャサ



リン・ヘプバーン、かなり異様なメイクですが、当時はこれを中国人とみなし得たのでしょう。この映画の後半では、日本軍の進攻、集団レイプ、村人の虐殺などがかなり詳しく描かれます。アメリカ人にとって当時の中国人は連合軍の同胞であり、救わなくてはいけない非力な子供でした。この映画も日本軍に立ち向かう中国人民に対する同情にあふれています。



**First Yank into Tokyo (1945)** はアメリカ軍人が日本に潜入するために顔を整形手術する、というユニークな映画です。たまたま彼は日本で育って日本語が流暢だということ、それと恋人が日本軍に殺されたので復讐に燃えて、このミッションに志願します。手術前、「一度変えたら二度と元には

戻らないが覚悟はいいか」と念を押されていますが、これはあたかも人間から醜いサルに変わるような怖い感覚です。しかし、包帯を取ったこの顔が日本人そっくりだといわれても、まるで冗談のようです。私たちの目から見たら、メイクした白人以外の何者でもありません。しかし、主人公はこれで日本へ潜入し、アメリカ人が捕らえられている捕虜収容所へもぐりこんでいきます。この映画は最後、勇ましい音楽とともに原爆シーンで終わり、連合軍の勝利を祝います。

アニメーション **Bugs Bunny Nips the Nips (1944)** は、バグズ・バニーが南洋の小島へ漂着すると、そこには敵国の日本兵がいた、という設定です。子供向けのアニメーションにも「ジャップ」が登場したわけで、「君が代」などもちゃんと盛り込まれています。日本兵は、私たちが聞いて



も分からないような不思議なコトバを早口でわめいています。アメリカ人の耳に日本語というのはこのように甲高く聞こえたようです。また、この出っ歯、吊り目、丸眼鏡も日本人を表象する典型的な「記号」と言えるでしょう。裸足というのも異様ですが、足の親指が異様に大きく描かれているのもどこか動物的です。

さて、次に見たいのは、東洋女性に対する二種類の根強いステレオタイプです。端的に言って、アジア人女性像は大きくふたつに分けられます。ひとつは男性に献身的につくす可憐な蝶々夫人のイメージ、もうひとつはエロティックな妖艶さをふりまくドラゴン・レディーのイメージです。

『八月十五夜の茶屋』*Teahouse of the August Moon* (1956) は戦後、沖縄を占領したアメリカ軍のドタバタを描いたコメディで、日本で撮影されました。故・淀川長治氏もチョイ役で出ています。



主人公の軍人はグレン・フォード、そして沖縄の通訳は名優マーロン・ブランドが演じています。ここに村人からのプレゼントだといって芸者（京マチ子）がやってきました。この軍人と芸者の組合せもじつは「蝶々夫人」のパロディですが、いたれりつくせりのお世話が、ここではマンガチックに描かれています。しかし、アメリカ本国には到底いないこの種の女性、男性にあらゆる快楽をサービスする女性というのは、男性としては秘かに理想としていたところでしょう。また、沖縄を統治下に置いたアメリカ側の意識を知る意味でも、これは貴重な一作です。



蝶々夫人と対照的なのが、『スージー・ウォンの世界』*The World of Suzie Wong* (1960) に出てくるような、はすっぱでセクシーな中国女性です。彼女は香港の売春婦ですが、ホテルの客に呼ばれて部屋に来ます。主人公のウィリアム・ホールデンはアメリカ人の画家で、彼女にモデルとしてポーズして欲しいと言いますが、彼女は冗談じゃない、売春婦の沽券にかかわると怒ります。きつぷのいい可愛い小悪魔といったところですが、すれっからし風のこんな彼女もじつは心は純粹だったということで、二人の仲は後で恋愛関係に発展していきます。

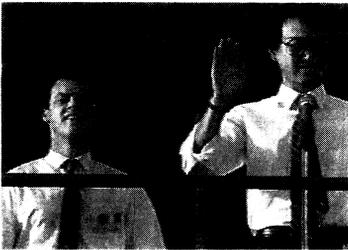
このようなセクシーな猛烈女は「ドラゴン・レディー」と呼ばれますが、例えば今、中国系アメリカ人女性の間で「スージー・ウォン」と言えば、イコール、こういう古くさいステレオタイプはいい加減に止めてほしい、という代名詞になっています。

この両極端のタイプから、アメリカ側の東洋女性に対する欲望の方向、性的ファンタジーが見えてきます。ちなみに、スティーヴン・スピルバーグ監督は目下、

戦前の京都祇園を舞台としたアーサー・ゴールデンの小説 *Memoirs of a Geisha* (1997) の映画化の話を進めています。2000 年公開予定のこの作品、全編を通して英語を話す日本人芸者のドラマという、じつに時代錯誤的映画になりそうです。

さて、80 年代になってアメリカで浮上してきたのが日本との経済摩擦でした。初めにも言ったように、映画はその時代の空気を正直に反映してしまう、ということで、次にアメリカの対日感情の変化と揺れを、80 年代と 90 年代のふたつの映画で比較してみます。

『ガン・ホー』 *Gung Ho* (1986) は全篇、日米文化摩擦を笑いのめしたコメディで、主役はマイケル・キートン。アメリカの斜陽の町が、日本企業を誘致することに成功して、町を挙げて日本人の到着を歓迎します。社名が入った専用飛行機で乗り付けるというのもリッチな日本を現わしていますが、歓迎の赤い絨毯が敷かれると、日本人はなぜか靴を脱ぎだす、迎える市長もあわてて真似をする、というシーンは爆笑です。



名刺交換の様子や、白衣を着るのが好きな日本人など、実態をよくリサーチしています。操業第一日目、まず朝礼と準備体操から始まりますが、アメリカ側の労働者は笑い出してしまう。みんなで一緒に体操をするなど冗談じゃない、というわけです。このように、真面目で集団主義の日本人と、

個人主義でいささかノー天気なアメリカ人が常に対比されますが、最後には一緒に頑張ろうぜ、と一種のハッピーエンドになります。

日米経済摩擦も、90 年代になると相当アメリカ側の苛立ちも募り、空気が変わってきます。殺人ミステリー『ライジング・サン』 *Rising Sun* (1993) は原作が売れっ子のマイケル・クライトンで、「アメリカ経済を乗っ取ろうと陰謀を巡らしている日本」といった原作と比べ、映画はこれでもかなりトーンダウンした出来となりました。なにしろ殺人犯が日本人からアメリカ人へと変更されてしまったほどです。



日米の企業間で提携の交渉をしているシーン、しかし日本企業側は相手の会話を盗聴しています。ここからして「卑怯」で「アンフェア」な日本人という印象は強烈です。どんな手段を使ってもビジネス戦争に勝とうとする戦闘的な日本人が描かれます。この映画が公開された時、アメリカ各地では

アジア系アメリカ人が抗議のピケを張りました。ハリウッドが描く「世界制覇を目論むズルい東洋人」像は、フー・マンチューの時代からなら変わっていない、というわけです。「不気味な東洋人」「ミステリアスで不可解なアジア人」といった描写で常に迷惑するのは、日々アメリカで生活しているアジア系です。

以上、駆け足でハリウッド映画のアジア人描写の歴史を見てきましたが、ひとこと付け加えておきますと、これがアジア観のすべてを語っている、というわけでは決してありません。映画という視覚メディアを資料としてアメリカ側のアジアへの目線の一端を検証した、とお考えください。しかしまた、このように営々と培われてきたイメージというのは意識下にすり込まれて、しぶとく生き残るものだというのも事実です。

さて、さまざまなアジア人像を見てきましたが、こういう映像を観る時に私たちは往々にして笑ってしまいます。私たちはこんなじゃない、と、自己イメージとのズレがあるからです。しかし、ステレオタイプということで留意しておきたいのは、私たち日本人あるいはアジア人がこのように陳腐な姿で表象されてきたという歴史事実を認識すると同時に、私たちもまた紋切型イメージを他者に押しつけている、という相対的な見方です。

ごく身近な例でいえば、ラーメンの CM といえば今だにジャンとドラが鳴り、ナマズ髭でチャイナ服を着た人物が出てくる。お笑い番組で、アフリカ人を表象すればかならず顔を黒く塗って腰ミノをつけ槍を持っている姿が登場する。そして別に悪意はなかった、悪気はなかった、と弁解するわけです。しかしステレオタイプの定義の一つには「必ずしも悪意はない」点が挙げられます。

あるイギリス人は日本での紅茶の CM に「いかにもこれぞイギリスの伝統と

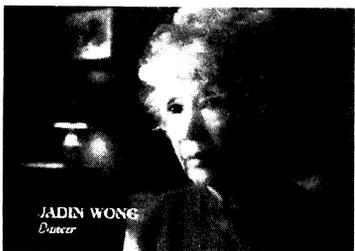
いった一種のステレオタイプの映像描写」を指摘していました。アメリカ人もまた「ウンザリするほど同じパターンアメリカ像」を嘆きます。悪気がないどころか日本人の欧米文化に対する「憧れ」すら、陳腐な描写と化し、ステレオタイプにはまりやすい、ということでしょうか。これだけ情報が行き交う現代でも、他者認識というのは安易な型にはまりがちだ、ということが言えます。

### 3. アジア系アメリカ人の映像作家たち

さて、現代のアジア系アメリカ人が、このようなハリウッド映画の歴史を振り返った時に、いかに愕然とするかご想像がつくと思います。アジア人にしろアジア系移民にしろ、常に白人メインストリームの側から解釈され、描かれ、ステレオタイプを押しつけられてきた。あるいはアメリカ社会の一員として生きてきた歴史もまったく無視されてきた。そうであるなら、自分たちのことは自分で描こうじゃないか、われわれアジア系の歴史もあれば視点もあるんだ、というわけで、ようやく 80 年代からはアジア系アメリカ人たちも次々に映画を作り出しています。これも地味なインディーズから、90 年代の今やメジャーが配給する映画に至るまで、いろいろな作品が出てきています。

次に、そういった気鋭の監督たちの作品を 4 本お見せします。

**Forbidden City, U.S.A.** (1989) は 1930



年代からサンフランシスコにあった中国系クラブ、Forbidden City を掘り起こしたドキュメンタリー作品です。昔、ダンサーや歌手として活躍した人たちにインタビューしながら、古いフッテージや写真を巧みに挿入していく。かつて美男美女だった芸人たちも今は老境にあります。昔を語る時の表情には素晴らしいものがあります。中国系だってアメリカ人と同じようにタップを踊ったりビッグバンドで歌いたかった、そういう才能を持った人材も多くいた。だがその一方では中国の伝統を重視する親世代との葛藤もあった、と、そこに中国系移民史もはめこんでいく。

監督のアーサー・ドン自身も中国系二世ですが、大学時代から優秀なドキュメンタリーを数多く撮ってきました。今はテーマをゲイの方へ移しつつありますが、最近ではゲイの差別史を扱ったドキュメンタリー作品でサンダンス映画祭で賞を受賞しています。



同じ中国系でも『ウェディング・バンケット』*The Wedding Banquet* (1993)

は台湾からの新移民、それもニューヨークに暮らすヤッピー世代のコメディ・ドラマです。しかも主人公の青年は白人男性とゲイの関係にあります。彼は再三にわたる親からの結婚の催促で、やむなく偽装結婚

を企てます。相手の女性も上海からの不法滞在移民で、永住権欲しさで結婚話に乗っかります。ところが両親が台湾から訪ねてきたために、三人は嘘を取り繕うのにテンヤワンヤ。これはベルリン国際映画祭でグランプリを受賞しました。アジアからのリッチな新移民、ゲイ関係、偽装結婚と、90年代の新局面を描いた映画です。

監督のアン・リーは台湾出身ですが、今やハリウッドで大活躍しているのはご存じでしょう。『ある晴れた日に』*Sense and Sensibility* (1995) や『アイスストーム』*The Ice Storm* (1997) 等、最近ではアジア系のテーマから離れて続々と新作を発表しています。

一転して『ミシシッピー・マサラ』*Mississippi Masala* (1993) はインド系のお話です。私たちがそうですが、アメリカ人にとっても、なぜアメリカにインド



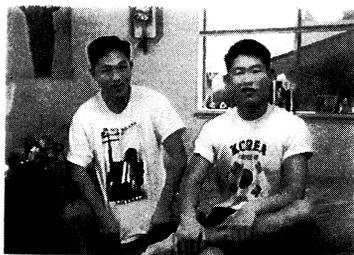
系がいるのかよく分からない。ここで、主人公の女性は説明をしています。祖父の代がイギリスの鉄道建設でアフリカのウガンダへ渡ったこと、両親も自分自身もウガンダ生まれだったが、アミン将軍のアジア人排斥政策で一家で国を追放されたこと……。彼女の一家はじつは複雑な国際現代史を背

負っているわけです。最後にこのミシシッピーに流れつき、インド系コミュニティーに合流する。そして、黒人のデンゼル・ワシントンと知り合い、人種を越えた恋が芽生えます。

最近、文学界では「ディアスポラ」という言葉が盛んに使われます。流浪の民、離散の民という、もともとはユダヤ系から来ている言葉ですが、このインド系一家などはまさにディアスポラです。流れ流れついて今ここにいる、という流動的な自我ですね。アジアからの難民も国を失ったディアスポラでしょう。

この監督ミラ・ナイール自身もインド系女性ですが、その後、インドを舞台にした『カーマ・スートラ』*Kama Sutra: A Tale of Love* (1996) などを撮っています。

最後に韓国系の姿もちょっと見ておきましょう。*My America (... or honk if you love Buddha)* (1997) は日系三世のレネ・タジマが撮ったドキュメンタリー、アメリカをあちこち車で移動しながらさまざまなアジア系に出会っていく趣向です。この兄弟はソウル・ブラザースと名乗るラッパーで、兄は赤ん坊の時に韓国から来ましたが、



弟の方はアメリカ生まれです。一世の両親は英語が覚束ないけど、息子たちはどっぷりとアメリカ文化の中で育っています。今や、こういう子たちがどんどんアメリカ社会に浸透しているという現実があります。

このドキュメンタリーには、中国系の老俳優、市民権運動家で有名な日系二世のユリ・コウチャマ、ラオスの山奥から来たモン族の貧しい一家など、いろいろなアジア系が出てきます。これも去年サンダンス映画祭で賞を取りました。

このように、映画にしても、アジア系の視点が加わってくることによって、アメリカ像というのをより多面的で奥行のあるものにしていきます。多文化的視点はアメリカ社会の新たな「読みなおし」をし、アメリカ像をより立体化しているのです。

アジア系アメリカ人の重要性は今後 21 世紀にかけてますます増していくでしょう。また、映画というメディアでこれから彼らがどんな <sup>セルフポートレート</sup> 自画像を描いていくのか、それも楽しみです。それと同時に、ハリウッド映画に現われるアジア人描写もウォッチングし続けていきたいと思えます。■

\*\*\*

本稿は、1998 年 12 月 9 日に行われた立教大学アメリカ研究所主催公開講演会「多文化主義時代と映像——ハリウッド映画の中のアジア人」の発表原稿に加筆し文章化したものである。所長の小林憲二教授、所員のノノ瀬和夫助教授、囀託の飯岡詩朗氏に深謝したい。

\*\*\*

## 参考文献

### I. アジア人、アジア系アメリカ人表象

ジョン・W・ダワー『人種偏見 太平洋戦争に見る日米摩擦の底流』猿谷要監修、斎藤元一訳、TBS プリタニカ、1987 年。

村上由見子『イエロー・フェイス ハリウッド映画にみるアジア人の肖像』朝日選書、朝日新聞社、1993 年。

村上由見子『アジア系アメリカ人 アメリカの新しい顔』中公新書。中央公論新社, 1997年。  
エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』板垣雄三他訳。平凡社, 1986年。

## II. ヘイズ・コード

加藤幹郎「補遺 映画製作倫理規定」『映画 視線のポリティクス——古典的ハリウッド映画の戦い』筑摩書房, 1996年。155-74頁。

## 映像資料

本文での言及順。作品ごとに原則的に上から、原題（公開年）、日本版ビデオの有無（「絶版」とあるものもレンタル・ビデオ店によっては扱っている）、監督、キャスト、製作会社の順にデータを表記する。

### *The Cheat* (1915/1918)

『チート』(IVC)

Director: Cecil B. DeMille

Cast: Sessue Hayakawa (早川雪洲), Fannie Ward, Jack Dean

Production company: Jesse L. Lasky Feature Play Company

### *Broken Blossoms* (1919)

『散り行く花』(IVC)

Director: D.W. Griffith

Cast: Lillian Gish, Richard Barthelmess

Production company: D.W. Griffith Productions

### *The Bitter Tea of General Yen* (1933)

Director: Frank Capra.

Cast: Barbara Stanwyck, Nils Asther

Production company: Columbia Pictures

### *The Mikado* [operetta]

Writer: William S. Gilbert

### *Charlie Chan at the Circus* (1936)

Director: Harry Lachman.

Cast: Warner Oland, Keye Luke

Production company: Twentieth Century Fox

***Charlie Chan at the Wax Museum* (1940)**

Director: Lynn Shores

Cast: Sidney Toler, Victor Sen Yung

Production company: Twentieth Century Fox

***The Face of Fu Manchu* (1965)**

Director: Don Sharp

Cast: Christopher Lee, Nigel Green

Production company: Hallam

***Mr. Moto's Last Warning* (1939)**

Director: Norman Foster

Cast: Peter Lorre, Ricardo Cortez

Production company: Twentieth Century Fox

***Dragon Seed* (1944)**

Directors: Harold S. Bucquet, Jack Conway

Cast: Katharine Hepburn, Walter Huston

Production company: MGM

***First Yank into Tokyo* (1945)**

Director: Gordon Douglas

Cast: Tom Neal, Barbara Hale

Production company: RKO Radio Pictures

***Bugs Bunny Nips the Nips* (1944) [animation]**

Director: Friz Freleng

Production company: Warner Brothers

***The Teahouse of the August Moon* (1956)**

『八月十五夜の茶屋』(ワーナー・ホーム・ビデオ)

Director: Daniel Mann

Cast: Marlon Brando, Glenn Ford, 京マチ子

Production company: MGM

***The World of Suzie Wong* (1960)**

『スージー・ウォンの世界』(絶版)

Director: Richard Quine

Cast: William Holden, Nancy Kwan

Production company: Paramount Pictures

***Gung Ho* (1986)**

『ガン・ホー』(CIC・ビクタービデオ)

Director: Ron Howard

Cast: Michael Keaton, Gedde Watanabe

Production company: Paramount Pictures

***Rising Sun*** (1993)

『ライジング・サン』(フォックス・ホーム・エンターテイメント)

Director: Philip Kaufman

Cast: Sean Connery, Wesley Snipes, Cary-Hiroyuki Tagawa

Production company: Twentieth Century Fox

***Forbidden City U.S.A.*** (1989) [documentary]

Director: Arthur Dong

***The Wedding Banquet*** (1993)

『ウェディング・バンケット』(CIC・ビクタービデオ)

Director: Ang Lee

Cast: Winston Chao, Mitchell Lichtenstein, May Chin

Production company: Central Motion Pictures Corporation

***Mississippi Masala*** (1991)

『ミシシッピー・マサラ』(絶版)

Director: Mira Nair

Cast: Denzel Washington, Sarita Choudhury

Production companies: Black River Productions, Mirabai Films, Movie Works

***My America (. . . or honk if you love Buddha)*** (1996) [documentary]

Director: Renee Tajima-Pena